

# SINAPIS



Vol.  
93

2024. 2

社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

## 月刊シナピスニュースレター

年間テーマ ～ 平和を目指してともに歩もう ～



地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、愛し合うように願って平和の種をまき、やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区  
社会活動センター・シナピス

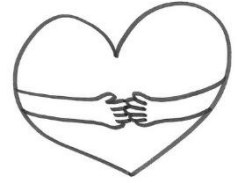
TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203

Email/sinapis@osaka.catholic.jp

ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

タイトル:「友だちになろう」  
作:丸田 和(なごみ) (小学2年)

第2回シナピス主催絵画コンテスト  
ピース賞 受賞作品



諏訪 榮治郎 名誉司教

思えば阪神淡路大震災（1995. 1. 17）都市直下型地震。東日本大震災（2011. 3. 11）10mを越える津波、福島第1原発事故。さらに世界ではロシアとウクライナ・イスラエルとパレスチナなど紛争に伴う悲惨な問題に直面し傷付く大地に生きる私たちです。

そんな中で、新年早々の能登半島大震災（2024. 1. 1）。その詳細がつかめず寒さの中で凍え、救援を待つ方を思うと心が痛みます。私たちの歴史はどこに向かい行くのでしょうか。

私の司祭職を振り返ってみると、半数は大地震被災地との関わりでした。それは悲しみと悔しさの中ではあるものの、多くの犠牲の中に何か意味のあった経験であったように思います。いま思いつくままに記していきたいと思います。

震災とは無縁と言われ続けていた阪神地区、思いもよらない早朝の大震災・・・被災した近隣住民は自分を忘れて隣の人に心を砕き、お互いを支え助け合っていた。いつしか「思いやり」が街のテーマとなっていました。

また救援活動を通して困難な状況を目の当たりにする中で、被災以前にも存在していた様々な人間の抱える恒久的な問題が見えてき始め、社会が次第に変えられていくこととなったように思えます。後に「ボランティア元年」といわれたように、現地救援本部となっていた教会は、各地から駆けつけてくれた青年たちの場となり、教会が新たな姿を見せはじめました。ボランティアに参加していた大学生たちのなかには、学校に戻らずボランティア活動に専念してくれた青年たちもいたのです。それは彼らの「自分探し」の場ともなっていたのです。

また、教会を拠点としていた青年たちの目には、身内では気づかなかった「内向きな教会」の姿が映り、幾度となく厳しく指摘してくれたのです。これは教会の刷新に大きな一石を投じてくれることになったのでした。

教会刷新は、教会外の方々に尋ねるのが良いと思った次第です。被災ゆえに教会が変えられていくこととなったことは皮肉な話です。

また東日本でボランティアに参加したある高校生を思い出します。彼は喜んでボランティアに参加したのではなさそうでした。彼は割り当てられた作業に、うつろに向かっていました。

夕刻、その作業を終えた彼は泣きながら帰ってきたのです。「何があったのか？」と聞くと、ホタテ貝に噛まれたことを語りだしました。言われたとおりの作業をこなしていた時、思ってもみなかったホタテ貝に力いっぱい噛まれたというのです。

「痛い！」と思うと同時にホタテの命を一瞬に感じ、「自分もホタテ貝とともに命をもって生きている！」という事実に出会い、いとおしく涙が溢れたと言いました。

「こんなこと教科書には書いてなかった」と彼は言い、命の出会いを喜び、涙をぬぐいな

がら宿舎に帰っていきました。ボランティア活動を通して、大切なことを得た青年を思い出します。

「なんでこんな悲しみがあるのか？」と問いかけられます。しかし、このような様々な困難の前に全く無力な私たちには何のすべもありませんが、困難と悲しみの出来事は、どのように隣の人に最良のことを手渡すことができるのかを思い起こさせてくれるのです。

その中で私たちは光を見いだします。多くのボランティアの方々がみんな笑顔で一日を終わります。彼らの明るい声が、静まり返った暗い被災地を明るく照らしてくれるのでした。

『21世紀の歴史 未来の人類から見た世界』（2008/作品社）を著わしたJ・アタリ（フランスの経済学者）は次のように記しています。

21世紀 その歴史はいくつかの波に流されながら、戸惑いの歩みを踏むだろう。しかし2060年頃・・・単なる人間の思い(民主主義や力の論理)を超えた利他愛にもとづく人類の新たな境地としての「超民主主義」が出現せねばならない。自国の利益を超え 世界の人々の利益を優先する生き方 企業のあり方が変わる。弱い立場に置かれた人々や子どもたちの命を守る 新しい生き方を求める社会の到来を創らねば、人類は生きていけなくなる。未来を創るための新しい生き方が広がらねばならないのである。

それを補足するかの如く、ピエール・テイヤール・ド・シャルダン（イエズス会士・考古学者）は次のように語ります。

人間は未だ、知恵の存在として未熟な段階にあるが、進化の流れは、知恵の世界の確立へと向かっており、人間は、知恵の究極点である「オメガ点（Ω点）」へと進化の道を進みつつある。「オメガ」とは未来に達成され出現するキリストであり、人間とすべての生物、宇宙全体は、「オメガ点」に向かった歩むのである。「聖体」は宇宙の動きに方向を与え、そのゴールを予期すると同時に、それを促すものである。宇宙は最終的に聖変化されると考える。

多くの悲しみの中にあっても、希望と展望をもってこの旅を歩み続けたいと思います。

創世記 50章 20節が浮かんできます。兄弟から奴隷として売られたヨセフの言葉です。

ヨセフは兄たちに言った。「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。

## 年間テーマ

### ～平和を目指してともに歩もう～

身近なことから世界に至るまで、互いを思いやれないことで生じる衝突が後を絶ちません。剣を取る者は皆、剣で滅びる」(マタイ 26:52)と言われたイエスの生き方に倣い、暴力に打ち勝つ強い信念をもち、交わりを通して互いを理解し尊重しあえる平和の実現を目指します。

このニュースが皆さまといっしょに考え、わかちあいの場となることを願っています。

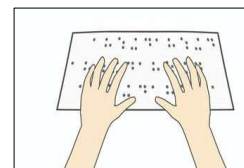
## 「賜物」を分かちあうために ～情報保障グループの紹介～

障がい者委員会 委員長 石井 望

ミサや集まりの時、障がいを持つ人も持たない人も、適切な方法で情報が提供され、コミュニケーションを深めることができれば、祈りや交わりを共有できればどれほど豊かだろうか……。そんな願いからも小教区、諸イベントや研修会、会議などで、障がいを持つ人への情報保障をされているところがあります。教区公式行事のミサでは、障がい者が行事に参加するから情報保障するのではなく、主催者としてあらかじめ点字版パンフレット作製、手話通訳、文字通訳・要約筆記などの参加しやすい環境を作ることを前提とした企画を心がけています（2023年8月号の「シナピスニュース」参照）。

今回は三つの障がい者への情報保障グループを紹介します。

- ① フレンドリー点字部
- ② 聴覚障がい者ボランティア会
- ③ 要約筆記グループ「エッフアタ！」



### ① 力障連大阪フレンドリー点字部 笠松幸彦

力障連大阪フレンドリーは、『点訳ネット・レジナ』から引き継いで、原則大阪教区内の視覚障がい者に対する情報提供のために働くことを目的として、力障連大阪フレンドリーの承認を得て「点字部」を2020年に設立しました。

活動としては、現在では毎月第2火曜日の午後に勉強会・分かち合いをしています。

参加者は2つのグループで合計14名です。

情報提供は点訳本として、大阪高松教区の旧大阪教区・「シナピスニュース」「シナピスの風」、京都教区時報、仙台教区報、毎日のミサ、「デイリーブレッド」、「ハーベストタイム」、大阪教区枚方教会ニュース・「グアダルペ」、教皇メッセージなどを作成し、視覚障がい者に情報の提供をしています。また、読者からの要望に応じて点訳をして情報の提供をしています。カトリック教会関係でない方の要望にも応じています。

勉強会では、パソコンを使っての点訳編集の仕方や勉強など分かち合いをしながら行っています。

☆ 定例会：毎月第2火曜日午後

姫里集会所（奇数月）と北須磨教会（偶数月）

問合せ：電話 090-5661-4324、

メール kasamatsu-yukisan@isis.eonet.ne.jp

② 「大阪教区聴覚障がい者ボランティア会」

磯部和子

聞こえない人への手話通訳を目的とした、キリストのみ名のもとに集う聞こえる人の集まりです。教区の公式行事、または依頼に応じて通訳者の派遣をしています。

月に2、3回開かれる例会は、通訳者の学習・養成のため、協力司祭や聞こえない人も交えて、聖書朗読の手話表現などを学習しています。

今は、日本ろう福音教会翻訳・製作、聖書協会発行の、「日本手話訳聖書」(DVD)を参考に、聖書の内容を考えながら、聞こえない人に伝わりやすい表現を試行錯誤しながら、和やかに学んでいます。リモート参加できるようにも取り組み中です。

各小教区や個人で、手話の学習をしたり、聞こえない人と関わっている方とも連携をとれたらと思っています。また、聞こえない人からのご連絡も待っています。参加をお待ちしています。

☆ 例会：毎月第1、3、5水曜日、AM10:00～PM2:00 (学校の長期休暇中は休み)  
カトリック姫里集会所(大阪市西淀川区姫里2-2-13<最寄はJR・阪神電鉄・姫島駅>)

③ 要約筆記グループ“エッフアタ！”

新田良子

文字で通訳する情報保障(身体的なハンディキャップにより情報を収集することができない人に対し、代替手段を用いて情報を提供する)グループです。

“エッフアタ”は“開け”という意味です。「エッフアタ！」(開け)というキリストのお言葉が、私たちの耳を開き、私たちが神の言葉に耳を傾けることができますように。そして、私たちの口が開き、私たちが言葉と行いをもって信じる心を表していくことができますように、という意味で名付けました。

現在メンバーは7人です。要約筆記の正式な勉強をしたのは3人だけですが、月に一度集まって、教区事務局会議室で毎月一回公開練習会をしています。

初心者が多いのですが、7人のメンバーのうち都合のつく者で、教区ミサの時、玉造のカテドラルのスクリーンに文字を表出しています。

パソコンの要約筆記で、IPtalkというソフトかcaptiOnline(遠隔文字通訳システム)というのを使って要約筆記をしています。

文字が表出されるのを見て、興味のある方やどうなっているんだろうと疑問に思われている方はぜひ練習会にお越しください。

☆ 公開練習会：毎月第二水曜日 AM10:00～12:00  
教区本部事務局一階会議室(大阪市中央区)

新型コロナ流行の「おかげ」で、自宅や病床からでもスマホなどでコミュニケーションするノウハウが普及しました。自分では使わなくても、スマホを持っている人が同伴して参加すれば、さらに豊かになるでしょう。

紹介したグループの例会や練習会については、遠隔地からでもオンライン参加できるよう準備中です。障がい者委員会のメール(dis@osaka.catholic.jp)などでお問い合わせください。

## パレスチナ、イスラエルとともに在ることを願い

シナピス運営委員 西口信幸

昨年10月7日のハマスの攻撃によって始まったGaza地区でのイスラエルとパレスチナの戦争、聖地での民族浄化とも思えるできごとを、私たちはどう考え、何をすれば良いのでしょうか。毎日伝わってくる情報に胸を痛め、この戦争を止めることはできないのかとウクライナの時と同じように、無力感の中で過ごしておられる方も多いのではないかと思います。このような世界の惨劇の中で、教皇フランシスコのことばが私たちに勇気を与えてくれます。

☆ 2つの『ノー』と2つの『イエス』

分断とあきらめに『ノー』と言おう！ 和解と希望に『イエス』と言おう！

今、はっきりと望まれているのは「即時の停戦」、そして双方に永遠の日常がもどること。国連をはじめ多くの人が長い間取り組んできて、誰もこんな事態を望んでいないのに、なぜ「和解」が実現しないのか。軽々に判断はできませんが、イスラエル、パレスチナの人の声を聴き、起きていることを見て、識別して、祈り、行動することはできます。罪ある行為は断固として糾弾し、目を背けず、声を出していかなばなりません、他の人を排除するものでないよう、聖霊の導きを求めて祈りたいと思います。できれば、この「シナピス」の輪を通して、ともに学ぶ機会が生まれるよう望んでいます。ご意見、ご提案をお待ちします。

### 【ガザで起こったこと】

- 10月7日のハマスの攻撃は、許すことができない戦争犯罪を生みました。
- 中東戦争の後、人口35万人の地域ガザに200万人もの難民が閉じ込められ、ハマスの政権後、2007年に作られた壁によって「天井のない監獄」として完全に封鎖されました。この事態が起こることは、抑圧と暴力にさらされてきた人々の報復として予想されていました。
- 残る人質の救出のため、ハマスの<sup>せんめつ</sup>殲滅のためという目的で爆撃、侵攻が100日以上続いています。人質の半分は救出できない中、ガザ全土の破壊が継続しています。
- ハマス殲滅を目的に、ほぼガザ地区全体が攻撃され、日々100人超（約半分以上が子ども）の市民の死者が出ています。
- ギリギリの生命線となっていた生活物資の搬送を絞り、水、電気、下水のシステム破壊により、飢餓状態、感染症などによって、生命の維持が危機的な状況にあります。
- イスラエル建国の後すぐ、UNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）が設立され、現在570万人の難民を支援（教育、保健を含む）してきましたが、すべての病院、学校が破壊されて機能不全になっています。
- 南アフリカがジェノサイドとしてイスラエルをICJ（国際司法裁判所）に提訴、軍事作戦の停止も要請されました。
- アムネスティ・インターナショナルは、50年以上も続く軍事占領や組織的な国際法違反・人権侵害により、イスラエルのガザ地区への対応を2022年に「アパルトヘイト」と認定しています。

☆☆ ☆☆ ☆☆ 聴く ☆☆ ☆☆ ☆☆

【提案】多くの人に聴いていただけるよう、ガザの上映会を開催しませんか。

共同で上映会を開催できることを願い、賛同者、団体を募っています。

(1) 映画、動画 パレスチナ、ガザの人々の声を集めたドキュメンタリー映画、動画

①パレスチナ子どものキャンペーン

支援団体からの映画の紹介、ガザ緊急支援・自主上映会開催の案内です。

- ・「ガザ 素顔の日常」
- ・「ぼくたちは見た ガザ・サムニ家の子どもたち」
- ・「ガーダ パレスチナの詩」



- ②「ガザ・サーフ・クラブ」 自由を求め、サーフィンに興じる若者たちのドキュメント
- ③「ガザ 自由への闘い」 アジアドキュメンタリーズ
- ④ トゥー・キッズ・ア・デイ  
日本賞受賞の西岸地区子どもたちを追ったドキュメンタリー
- ⑤ ガザモノログ2023

(2) イスラエル、パレスチナに関する本

『イスラエル軍元兵士が語る非戦論』 ダニー・ネフセタイ (集英社新書)

☆☆ ☆☆ ☆☆ 知る ☆☆ ☆☆ ☆☆

①NHK特集1月20日 ガザ～私たちは何を目撃しているか～

オメル・バルトフ (元シスラエル兵) ホロコースト研究 (イスラエル生まれ)

230万人を狭い鳥籠に閉じ込め、抑圧と暴力が報復を生むことは予測できた。テロの2ヶ月前に声明を発表、パレスチナの違法な占領の人権侵害を訴えていた。「見て見ぬ振り」のサイレントマジョリティの沈黙が極端に向かわせる。声を上げるべき、居場所を共有する解決策を探るチャンスである。

ガーダ・アギール パレスチナ社会文化研究 (ガザ生まれ)

ガザが大切にしている価値、誇りにしている生き方をナラティブとして広めている。ハマスを殲滅しても、より強力な抵抗運動が出てくるだけ、権利、尊厳、自由が与えられれば隣人として生きていける。ナクバから75年立った今でも帰りたい。

スムード (resilience) 困難に耐え乗り越える力、信念、希望

イスラエルはここに留まることの大切さ、生き方への誇りを知るべきである。



② イラン・パペ、パレスチナを語る イラン・パペ つげ書房新社

「民族浄化」から「橋渡しのナラティブ」へ

③ イスラエルの起源 鶴見太郎 講談社選書メチエ

④ パレスチナ子どものキャンペーン パレスチナ問題とは <https://ccp-ngo.jp/palestine/>

④ パレスチナの代表的な産業について 駐日パレスチナ総代表部

## 支援者ヅラを捨てた「シナピスのクリスマス2023」

ビスカルド篤子

シナピスのスタッフが半減した2023年の待降節、「今年はとてもクリスマス会などできそうにないな」と私は内心思っていました。年末が押し迫っても人の出入りは相変わらずの激しさで、スタッフたちはイベントどころではなかったのです。

しかし難民さんたちは、顔を合わせれば誰もが「クリスマス、どうする?」と言いますし、「料理作るから人数言うてや」と、パーティーありきで予定を入れる人までいるのでした。それならば、今年は身近な当事者たちだけでごくささやかなつどいをやるか、と決めました。

私たちは、活動センターに身を寄せ合う難民さんたちと「どんなクリスマス会にするか」を話し合いました。いかにお金を使わずに楽しむか、会場設定はどんなふうにするか、買い出しは誰が行くか、体の弱い人のための送迎はどうするか、など、みんなで意見を出し合い、分担を決めていきました。

### クリスマス会の前日にナオコ倒れる

クリスマス会を翌日に控えた12月21日のことでした。スタッフのナオコの体が動かなくなりました。ナオコはギランバレー症候群の後遺症を抱えますが、激務に耐えながら連日活動に打ち込んで年末最後のイベントであるクリスマスまであと一日に漕ぎつけたところでした。



難民さんたちが飾ったクリスマス横断幕

彼女は並大抵でない精神力の持ち主ですが、無理が祟り、とうとう体が悲鳴をあげたのでしょう。ナオコはその日、全身が内側から無数の針に刺されるような激痛に襲われ、動けなくなりました。少しでも体を動かすとナオコは悲鳴をあげ顔を歪ませます。そんな彼女を見て難民さんたちが我先に介助しに群がってきました。ある初老の男性は「下がれ! 神経の病の苦しみは、神経の病気を持つ俺にしかわからんのだ!」といきり立ってナオコを支えようとし、失敗して一緒によろけるありさまでした。

すったもんだの拳句、ナオコはタクシーに乗せられ病院へ向かいました。

夜、ナオコから一言メッセージが届きました。「緊急入院」。

### 祈りに包まれたつどい

スタッフはアツコ1人になった12月22日当日。難民さんが出そろおうと私は朝礼を開きました。「ほな、皆頼むで」。リーダーのクレベルが段取りの最終確認をし終わると、各々持ち場に散らばり準備を始めました。午後には助っ人のボランティアさんたちが到着しました。

午後5時。ささやかなクリスマスの祈りが始まりました。シナピスではこの日に必ず流す動画があります。ジョン・レノンのHappy Christmasです。曲にかぶせて世界の戦争の姿がYouTubeで映し出されます。私は数え切れぬほどこの動画を見てきましたが、いつ見ても目頭が熱くなります。そしてまさにその戦地から日本に逃れ、たどり着いた大阪で、ともに身を寄せ合う難民たちが、蝋燭に灯をともし、祈るのです。一人も取り残すことなく平和になるように。祖国の<sup>ちちはは</sup>父母を、病床にあるナオコを、世界じゅうの戦地で苦しむ人を思い、平和を願う。





## はちゃめちゃんなクリスマス会



あ〜あ、せっかくの飾りがおっこちてしまったよ〜!

祈りの時を終えると、いよいよパーティーです。皆でテーブルや料理を運び込み、軽快なクリスマスの BGM を流し、さあ乾杯！とグラスに飲み物をついだその時です。何時間もかけて飾った「Merry Christmas」のデコレーションが、バッサリ剥がれ落ちてしまいました。いい加減な留め方をしたせいかいもいけません。面倒くさいので、飾りが落ちたままパーティーを始めました。

移住者の若者たちが、祖国のポップミュージックを踊って見せたり、楽器演奏したり、日本人も負けじと演歌を歌ったり、あっという間に時が流れました。

クリスマス会がお開きになると、運転免許を持っている難民さんが車を出して、何度もお客さんを駅までお送りしました。

他のみんなは黙々と片付け、最後まで台所仕事をしてくださったシナピスの運営委員さんが車に乗り込むと、時はすでに午後 9 時を回っていました。

シナピスに茶菓子やおつまみ、ケーキやアルコール類の差し入れをして下さった方がた、またカンパをくださった方がた、どうもありがとうございます。おかげさまで私たちはおなかも心も満たされて、じゅうぶん楽しむことができました。



国・文化の違いを越えて、ノリノリで踊る参加者たち

## からしだねの運動のまんなかにいる人たち

いまシナピスの事務局運営を支えるのは、運営委員さんのほか、数多くのボランティアさんたちですが、実は難民移住者の力も大きいのです。シナピスニュースの印刷発送作業、ちょっとした電話番号や書類整理、来客対応など、当事者たちが主体的に協力しあいながら、豊かに活動をともにしています。

1 月、ナオコは元気に復帰しました。

2024 年が明けました。今年は「支援者ツラを捨てて、助け合って生きよう」と自覚させられる 366 日間になりそうです。

さあ皆さん、本年もどうぞよろしく！



## 阪神・淡路大震災から29年を迎えて

### — 追悼と新生の集い たかとり教会 —

毎年1月17日に、たかとり教会では、宗教を超えて、阪神淡路大震災の犠牲者のための追悼記念集會が行われる。今年も各地から来た仏教各界の僧侶ら約10名とカトリック司祭によって祈りの集いが行われた。

午前5時半から開始。聖歌と聖書の朗読後、主司式の神田神父のこたばに続いて5時46分に黙とうがささげられた。

この間、鎮魂の願いを込めて、法ら（巻貝に穴をあけて吹きならす道具）の音が響きわたった。その後、僧侶たちによって般若心経が唱えられる間、参加者による焼香とろうそくの奉納。最後に司祭によってグレゴリオ聖歌サルベレジナが歌われた。



神田神父は、今年は特に能登半島の地震が起きたことに触れ、自分たちが29年前に体験した苦しみや悲しみをこれから被災地の方々が受けねばならないことに心を痛めていることを話した。ただ自分たちは被災体験を通して多くの新たな出会いとつながりができたこと、人と人とを隔てていた壁が取り払われたことを思い起こし、能登地方の人々に寄り添い、支援の輪が広がることを切に祈ろうと訴えた。

また現在のウクライナやガザの実態にも触れ、戦争は憎しみを残すが、災害は人と人との絆をもたらすと述べ、希望をもって歩もうと呼びかけた。

仏教界を代表して立った僧侶は、

- ものでも心でも惜しみなく他に与えること（布施）
- 優しい言葉がけをしたり思いやりの心で話すこと（愛語）
- 見返りを求めないで人のためになることをすること（利業）
- 相手の気持ちを感じる（同事）

これら4つの「仏の心」を、持とうと呼びかけた。

祈りの集会后、コロナ禍のために長い間提供できなかった豚汁も、今年は4年ぶりにふるまわれ、参加者はひさしぶりに再会した人たちと談笑し、交わり、被災当時の炊き出しの思い出に浸った。

（報告・松浦 謙神父）

## 能登半島地震被害についての報告と対応

### —お祈りと支援のお願い—

1月20日、カトリック名古屋教区は能登半島地震災害対応のための拠点として、カトリック金沢教会内に「カリタスのとサポートセンター」を開設しました。

能登半島には2つのカトリック幼稚園があります。その一つ「聖母幼稚園」がある七尾市では断水が続いており、完全復旧までには2～3か月かかるとのことです。そこで、幼稚園の運営に必要な水を支援することを決定しました。また、輪島市の「海の星幼稚園」では幼稚園再開には時間がかかることが予想されますが、再開に向けての物資支援や水支援を行う予定です。

また、みんなが集まれる場作りとして、「じんのび食堂」を計画しています。「じんのび」とは七尾の方言で「のんびり」という意味です。幼稚園の保護者や地域の皆さんが温かい食事をしながら、ゆっくり交流する場として、聖母幼稚園駐車場で食堂風の炊き出しを毎週末することを計画しています。

1月17日は阪神・淡路大震災から29年目の日でした。東日本大震災の被災者の方も今も厳しい状況に置かれた方がたくさんおられます。能登半島地震の被災者への関わりを通して、これらの人々のことも忘れずにお祈りください。お祈りとご支援をお願いします。

#### カリタスジャパン 《振込先》

郵便振替口座番号 : 00170-5-95979

加入者名 : 宗教法人カトリック中央協議会 カリタスジャパン

記入欄に「能登地震」と明記してください。

※「ゆうちょダイレクト」インターネットサービス、他行からお振込みいただく場合は、<https://www.caritas.jp/donate/> の「募金の方法」をご覧ください。

なお、「ゆうちょダイレクト」ならびに他行からお振込みいただく場合は、ご依頼人番号、お名前の後に「6258」（能登地震災害緊急支援募金の意向番号）を記入いただきますようお願い致します。

なお、お送りいただいた募金は支援活動に活用しますが、万一活動終了時に残金が発生した場合は、今後起こりうる国内災害の緊急対応のために使用させていただきます場合がございます。

#### 名古屋教区 《振込先》

郵便振替口座番号 : 00810-5-50605

加入者名 : カトリック名古屋教区

通信欄に「のと地震」と明記してください。

※小教区でとりまとめてくださる場合も、上記口座へお振込みください。

※お寄せいただいた救援金は、教区内の教会関連施設等の復旧、同被災者支援のために充てさせていただきますが、公益性の高い他の活動（被災地域全般）についても使わせていただくことがあります。

## 太田道子さんが帰天されました

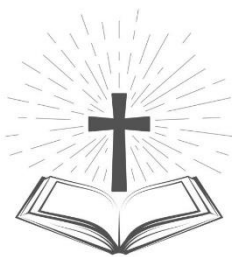


聖書学者の太田道子さんが、2024年1月2日午前、急性骨髄性白血病のため、小金井市の聖ヨハネ病院で、亡くられました。91歳でした。

太田さんは、1995年よりNGO「地に平和」の代表としてパレスチナの女性たちを支援する活動を続けておられました。亡くなる直前までパレスチナの人びとの身を案じておられたと伺っています。

太田さんは、大阪教区にとっても大きな影響と足跡を残してくださいました。1991年に勃発した湾岸戦争後に設立したカトリック大阪「平和の手」の初代事務局長を務められ、2年にわたり大阪教区の社会運動を盛り上げてくださいました。

そして、「平和の手」が今のシナピスの運動へつながってゆきました。



太田さんは、「聖書 新共同訳」の翻訳と編集に携わった聖書学者でいらっしゃいましたが、「太田先生ではなくて道子さんでね」と言われ、みんなに「道子さん」と呼ばれ親しまれていました。

（とはいえ、大物のオーラは強く、威厳がありました。）

西日本でも太田さんと親交のあった方は数多くいらっしゃいますので、太田さんを偲び、ささやかですが、追悼のお祈りを捧げることといたしました。

道子さんの遺言通り、沖縄の海に散骨する予定だそうです。

### 追悼ミサのご案内

日時：2024年2月25日（日）17時  
場所：カトリック大阪梅田教会（サクラファミリア）  
共同司式：松浦悟郎司教・和田幹男師・村田稔師



※ミサのあと、道子さんのゆかりの方に思い出を語っていただく予定です。



地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス（からし種）です。  
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、愛し合うように願って平和の種をまき、やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

シナピス年間テーマ～「平和を目指してともに歩もう」～


# シナピスの風

\*掲載行事はコロナ感染症の影響で延期または中止になることがあります。ご参加の際は連絡先にお問い合わせください。 第164号 2024年2月1日発行

2月の祈り

四旬節

慈しみ深い天の父よ、  
毎年のように  
四旬節を迎える時期になりました。  
断食、施し、祈りが求められます。  
断食を通して、  
戦争や様々な不正によって  
毎日の糧の権利を  
奪われている人々との  
連帯を具体的に強めたい。  
施しへの招きに応えて、  
すべてを奪われている人々を思い、  
皆が必要としている物は  
皆に行き渡る世界を実現するために  
働く決意を新たにしたい。  
祈りの中で、そのための知恵と力を  
求めたいのです。  
慈しみ深い天の父よ、  
イエスの従って歩めるように  
わたしたちを支えてください。  
アーメン。




災害被害者のための祈り

父である神よ、  
すべての人に限りないいつくしみを注いで  
くださるあなたに、  
希望と信頼をこめて祈ります。  
災害によって、苦しい生活を送り、  
不安な日々を過ごす人々の心を照らし、  
希望を失うことがないように支えてください。  
また、亡くなられた人々には、永遠の安らぎを  
お与えください。  
すべての人の苦しみを担われたキリストが  
いつもともにいてくださることを、  
祈りと行動によってあかすことができますように。  
わたしたちの主イエス・キリストによって。  
アーメン。  
(2021年2月16日 日本カトリック司祭協議会認可)

シナピスホーム

★毎週土曜日 13時ごろ～16時ごろ  
2月の開催：10、17、24日  
★月1回ランチ 11時ごろ～16時ごろ  
2月は3日(土)



志葉玲さん講演会

ウクライナとガザ

—戦場からの報告と提言—  
日程：2月12日(月・祝)  
13:00～15:00  
場所：カトリック大阪梅田教会  
聖堂(3階)

\*ジャーナリスト志葉玲プロフィール\*  
週刊誌や新聞、通信社などに寄稿、テレビ局に映像を提供。  
Yahoo!ニュース個人オフィシャルライター。

主催：カトリック大阪梅田教会社会活動委員会  
申込不要・参加費無料  
問い合わせ：カトリック大阪梅田教会  
TEL: 06-6371-4060

支援のお願い 感謝

日持ちのする食品、ハラル食品、食用油、米、  
カップ麺、テレホンカード、など  
ご支援をお願いいたします。




「点訳版」「音訳」  
ご希望の方はシナピスまで  
お申込み下さい。

## 難民移住者への支援物資提供 よろしくお願ひします。

米、ハラル食品、レトルト食品、油、  
レトルトご飯、缶詰、テレホンカード



お電話をお待ちしています！  
☎06-6942-1784



## ▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

- ◆広報活動
  - ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等社会活動の指針の伝達
  - ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ機関誌としてシナピスニュースを発行
- ◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携
- ◆学習会研修会の企画
- ◆こども基金
  - 世界・日本のこどもたちへの援助
- ◆日本カトリック司教協議会との連携
  - 正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣
- ◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ
- ◆難民移住移動者支援
  - 難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

シナピス公式  
さまざまなお知らせや情報を発信！  
友達追加は 📲 QR コードから 📲



## アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局



- 公共交通機関ご利用の場合
  - JR 森ノ宮駅より 約 1000m
  - 地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より 約 800m
  - JR 玉造駅より 約 1000m
  - 地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m
- 車でお越しの場合
  - 阪神高速 1 3 号東大阪線法円坂出口
  - 法円坂交差点南へ上町を東へ

## 活動へのご支援ご協力をおねがひします

- ☐郵便振替 00960-7-61419  
加入者名 カトリック大阪大司教区シナピス
- ☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958  
カトリック大阪大司教区 シナピス  
代表役員 前田万葉
- ☐オンラインはこちら →→→



HP はこちらから

<https://sinapis.osaka.catholic.jp>

ニュースレター配布停止ご希望の方は  
シナピスまでお知らせください。

あとがき

毎年、年の初めに「缶詰め会議」と称する研修会をおこなっています。今回はシナピスのスタッフと運営委員が宝塚黙想の家に集まって、2 日間の話しあいをしました。冒頭、どんなことが決まればいいのかを話しあったところ、旧大阪教区と旧高松教区が今後、社会活動の領域でどのように協働できるのかのイメージを明らかにしたいということになりました。

昨年夏に、2 つの旧教区がひとつになったとはいえ、まだお互いのことをよく知らないままです。研修会ではさまざまな意見が出されましたが、「つながる」という言葉が多用されたことが印象に残っています。新たに多様な人たちとつながっていく上では、これまで通りにはいかないことがおこるかもしれません。しかし、私たちの視野を広げ、活動の幅を広げていく機会にもなることは間違いのないでしょう。

今号の巻頭言は、旧高松教区で司教を務められた諏訪榮治郎名誉司教に執筆していただきました。また、障がい者委員会の方々に、活動の紹介もしていただきました。これを皮切りに両旧教区の人たちの交流をすすめ、協働の輪を広げていくことができればと思います。(I)